

小林裕和教授の来歴略（静岡県立大学定年退職の機に）

静岡県立大学・大学院食品栄養環境科学研究所／食品栄養科学部・教授・小林裕和先生は、2020年3月31日をもって静岡県立大学を定年退職されることとなりました。

小林裕和先生は、DNA 遺伝情報の解析を基盤とした分子生物学の黎明期、1982年に名古屋大学・大学院農学研究科・農芸化学専攻において、植物および細菌における光合成遺伝子の発現制御機構に対して農学博士学位を授与されました。その後、日本学術振興会・海外特別研究員（制度設置初年度）の全学術分野からの10名枠に採用され、Harvard University・Biological Laboratoriesにて、植物葉緑体遺伝子の発現制御機構を研究されました。1984年9月に名古屋大学・アイソトープ総合センターに助手として籍を得て、上記の研究を発展させられるとともに、取り分け葉緑体遺伝子発現におけるエピジェネティック制御機構の解明において、世界をリードされました ([PNAS, 1988](#); [EMBO J., 1990](#))。

1991年4月に静岡県立大学に赴任され、以来29年余、研究、教育、大学・部局運営に尽力されました。研究においては、食糧細胞工学研究室（2008年度以降：「植物機能開発研究室」に改称）を主宰され、モデル植物シロイヌナズナを主な研究材料とされました。葉緑体遺伝子発現を制御するシグマ因子のcDNAを世界に先駆けクローニングし、塩基配列を決定されました ([PNAS, 1997](#))。その後、この研究はシグマ因子のリン酸化を介した光障害回避機構へと発展し ([PNAS, 2010](#))、特許「光スイッチ」として今後の展開が期待されます。また、耐塩機構として、活性酸素除去の関与を世界で最初に解明されました ([Plant Cell, 1999](#))。緑色蛍光タンパク質 (GFP) の活用にあたっては、植物や動物での発現と検出を最適化した完全合成遺伝子を開発し ([Curr. Biol., 1996](#))、この普及に努められました。この論文は、1,500回以上引用され、静岡県立大学の最多引用論文の1つとなっています。

教育において、指導された博士学位授与者は10名余。修士学位授与者は40名余になります。2016年度から、静岡県立大学・全学共通科目に、「Japanology」および「静岡の市民活動」を開講され、学生の海外および社会への開眼に尽力されました。大学・部局運営としては、2005年度以降、専攻長、研究科長、研究院長、学府長、副学長を務められました。その間、日本初「静岡県立大学・大学院薬食生命科学総合学府」の2012年度開設の一翼を担われました。海外連携として、アメリカ合衆国では、ネブラスカ大学リンカーン校、カリフォルニア大学デービス校、同バークレー校、オハイオ州立大学、タイでは、マヒドン大学との大学間連携の締結およびその運用に尽力されました。さらに、創立30周年記念事業の一環としての「[10年後の静岡を創るスーパーセミナー](#)」（7回シリーズ）や静岡新聞に2019年11月から毎週月曜日に連載されている「[県立大発 まんが しずおかのDNA](#)」（30回シリーズ）の企画は、情報発信へのご貢献の一端です。

ご定年退職後は、ご自身の特許情報と「Japanology」のような情報発信を事業化する([株](#))[グリーン・インサイト](#)（大学発ベンチャー）の立ち上げを予定されています。

2019年12月吉日

「小林裕和 教授 定年退職記念懇親会」発起人

後藤慶一 (1992年度修了：東海大学・教授)

清水正則 (1997年度修了：常葉大学・教授)

後藤新悟 (2004年度満了：農業・食品産業技術総合研究機構・上級研究員)